

輝け！シン尾花沢中

第203号
令和8年
3月13日

長根の山の ふもとはら 遠いゆかりの おもだかの

明日はいよいよ卒業式です。以前、私が担任していた学級の生徒が卒業するときに「育ててくれた親のこんな気持ちを理解してほしい」との願いを込めて配付した文書を紹介합니다。

「いのち」の記憶 沢木耕太郎

2005年1月23日 日本経済新聞

子供のころ、朝早く起きなくてはならないことがあると、私は父に向かってよく頼んだものだった。

「明日の朝、起こしてくれる？」

そう言って、起こしてもらいたい時刻を告げる。すると、父はうなずき、それがたとえどのような時刻であっても必ず起こしてくれた。私は起こしてもらったたびに不思議に思ったものだった。お父さんはどうしてこんなに早い時間に起きるのだろうか？

やがて、私も父親となると、子供に頼まれることになった。

「明日の朝、起こしてくれる？」

◎ ◎ ◎

そして、気がつくやうに、子供に言われた時刻に起きて、子供を起こしている自分がいた。自分が親になってみると、子供のために朝早く起きるなどということは、少しも難しいことではないことが分かる。しかし、起こされた子供の眼には、恐らく子供の頃の私が浮かべていただろうものと同じ種類の不思議そうな光が宿っている。お父さんはどうしてこんな早い時間に起きられるのだろうか？

もし、子供に面と向かってそう訊ねられたら、どう答えていただろう。大人になると目ざとくなるのさ。あるいは、大人になると責任が増すのさ、とでも答えていただろうか。しかし、どれも違っているような気がする。親にとっては子供に頼まれたことをするのが少しも苦痛ではないのだ。もしかしたら、それは「喜び」ですらあるかもしれない。

あるいは、私の子供の頃の食卓での記憶に、こんなものがある。食べ盛りの私のおかずの皿に何もなくなってしまふと、母が自分の皿から肉や魚を私の皿に移してくれて、言う。

「食べなさい」

そのときも、子供のころの私は思ったはずだ。お母さんはおなかがすかないのだろうか、と。

そして、気がつくやうに親になった私も母と同じようなことをやっていた。年をとると、育ち盛りのときほどの食欲がなくなっているということもあるだろう。だが、それだけでなく、なにより子供がおいしそうに食べている姿を見ることは自分の「喜び」であるからだ。

◎ ◎ ◎

ある意味では、親は子に、「睡眠」や「食物」を削って、与えていると言えなくもない。だがそれは親の「義務」だからというのではなく、「喜び」であるからだ。それを愛情といってもよい。しかし、大方の親たちは、それを愛情とも意識しないまま、ごく普通に行っている。「睡眠」を削り、「食物」を削るということは、「生命」を削るということと等しい行為である。自分の命を削って、子に与える。それが何でもないことのように行われることによつて、「いのち」もまたごく自然に伝えられることになるのだ。

(略)

親から「いのち」を与えられた記憶は、自分の子へ「いのち」を与える行為につながっていく。つまり、それは「いのち」をめぐる記憶の連鎖とでもいうべきものだ。(略)

お子様がさらに成長して、幸せな人生を送ることを期待しています。【文責：校長 工藤雅史】